特集

AI時代の「考える力」をどう育むか

前ページまでの調査報告が示す通り、AIは既に高校生の日常生活に浸透しており、彼らの学びや将来に対する意識にも影響を及ぼしつつあります。

こうした急速な普及の一方で、学校現場からは「生徒にどこまで、どのようにAIを使わせるべきか」という悩みの声がよく聞かれます。AIに頼ることで思考が止まってしまうのではないか――そんな不安を抱くのは、生徒の成長を誰より願う先生方だからこそでしょう。

テクノロジーが人間の能力を補完し始めている今、私たちがこれまで培ってきた「考える力」の定義そのものが、新たな形へとアップデートされようとしているのかもしれません。AI時代に育むべき思考の核心はどこにあるのか。どうすればAIを、生徒の可能性を広げるために使いこなしていけるのか。

本特集では、AIと共に歩む時代の「考える力」を探ります。ページをめくりながら、私たちと一緒に考えていただけますと幸いです。

イラスト／三嶋さつき

先生方に聞いてみました

生徒の生成AI活用について、課題やお悩みはありますか？

『キャリアガイダンス』読者アンケートより抜粋

文章を書かせて提出させ採点するということに
意味がない時代に突入している気がします。
自分で考えて表現したものを評価するためには、
どんな方法をとればいいのか、戸惑いを感じています。
（大阪府／公立高校／探究担当／60代以上）

AIを使えば、誰でも一瞬で
「それらしい正解」が出せてしまう。
便利である反面、それは裏を返せば、
「できないままでいること」が奪われ、
常に何かしらの成果物を出すことを
「余儀なくされる」時代になったとも
言えるのではないかと思う。
効率よく答えを出す技術が進めば進むほど、
「迷う時間」や「空白の時間」が
許されなくなってしまうのではないか。
（神奈川県／私立中高一貫校／クラス担任／30代）

どこまで指示していいのか悩んでいる。
良いプロンプトを指示するのは簡単だが、
試行錯誤するなかで良いプロンプトを
見つけていってほしいとも考える。
（長野県／公立高校／進路指導担当／30代）

宿題などで、
課題や問いに対して文章で答える際、
AIにその課題や問いをそのまま入力し、
出てきたことをそのまま記入してしまう。
出てきた内容を鵜呑みにしてしまう。
（神奈川県／公立高校／教務担当／30代）

AIを活用する場面において、
唯一解を求めるような使い方になり、
いわば「AIで検索する」感覚で調べている様子が見られる。
また、生徒自身が問いを深めたり、
問いを見直したりするきっかけを十分にもてていないことも
課題として感じている。
（静岡県／公立高校／副校長・教頭／50代）

専門学校に対する自己PRを、
すべてAIで作ってくる生徒が目立ちました。
400字読んでも無味無臭の文章で、
熱意も志望理由も伝わらず、
こんなに味気ない文章になったのはなぜか
と問うとAIで作成したとのことでした。
ショックを受けました…。
（愛知県／公立高校／クラス担任／30代）

生成AIは人の
アドバイザーであるべき存在である。
まず、自分の考えをもち、
生成AIに客観的な意見を
求めることが必要だと感じる。
（自分の考えをもてないならば、
生成AIの意見を求めない方がいいかも）
（愛媛県／私立高校／進路指導担当／60代以上）

生徒は率先してAIを利用している。
特に教科の問題では解答をAIに解かせて
学習している様子がうかがえる。
しかし、実際の評価試験では解答に誤りがあるなど、
思考プロセスが必要な課題に向かない気がしている。
（熊本県／私立高校／進路指導主事・部長／60代以上）

現場の先生方からは、AIの便利さと引き換えに、生徒たちの「自分の言葉」や「思い悩む時間」が削ぎ落とされていることへの戸惑いの声が多く寄せられました。効率よく成果を出す技術が進む今だからこそ、自ら問いを立て、試行錯誤する力をどう育てるか。AIを単なる「答えの検索」の道具にせず、思考を深めるための「良きパートナー」へと変えていくためにはどうすればいいのか。教育現場は今、AIとの向き合い方の大きな転換点に立たされています。

AIとの向き合い方
について特集した
『キャリアガイダンス』Vol.452も
あわせてぜひ、お読みください！

Vol.452
2024.OCT